渋沢栄一の「夢七訓」

器を調達する計画を立てたが、ひょ

んなことから一橋家の家臣に取り立

てられ、慶応2年(1866年)

徳川慶喜の将軍宣下に伴い自動

紙幣改定において、新一万円札の肖 渋沢栄一は、今年7月発行予定の 中 垣 秀夫 陸 自 69 幣、 的に幕臣となり、維新後の明治政府 では井上馨の下で大蔵官僚として造

戸籍、

出納など様々な政策立案

第一国立銀行(現みずほ銀行)、 を行った。退官後は実業界に転じ、

も肖像の候補者として選ばれていた 像として採用された。日本を代表す の造幣局長)として、これまで何度 る経済人として、また初代紙幣頭(後 社や経済団体の設立・経営に関わっ 東京証券取引所などの多種多様な会 京商法会議所(現東京商工会議所)、

ら、髭のない渋沢栄一が採用される は髭のある人物を使っていたことか が、かつては偽造防止のため肖像に も及び、一 京瓦斯や日本郵船など約500社に た。そのうち企業は富岡製絲場、 「日本資本主義の父」と称

像に使えるようになり、今回、渋沢 が採用されることとなったのである。 の技術が向上し、髭の無い女性も肖 ことはなかった。現在では偽造防止 渋沢栄一は幕末(天保11年=18 大正、昭和(6 経済合一の思想』を唱えたことでも また『論語と算盤』を著し、「道徳 際交流、民間外交の実践等にも尽力 知られている。 し、男爵次いで子爵に叙せられた。 実業教育、女子教育、研究事業、国 される。同時に福祉事業、医療事業、

傑である。 江戸末期に農民 (名主) の長男として生まれ、武士(城代家 の生涯を駆け抜けるように送った英 的に次のように述べられている。 仁義道徳である。正しい道理の富で 「富をなす根源は何かと言えば、

年=1931年)にかけて波乱万寸

『論語と算盤』には彼の理念が端

40年)から明治、

金して理由なく踏み倒す)に立腹し、

従弟とともに高崎城を乗っ取って武

老)が百姓から搾り取る遣り口(借 ことができぬ」。そして、道徳と離 なければ、その富は完全に永続する れた欺瞞、 不道徳、 権謀術数的な商

もに、近代社会のありようを学んだ。 行していたアレキサンダー・フォン・ 感銘を受けた。この際に見聞した体 くとともに、また人間平等主義にも この体験を通じヨーロッパ文明に驚 進的な産業・諸制度を見聞するとと シーボルトから語学や諸外国事情を ロッパ各国を訪問する昭武に随行 その際に通訳兼案内役として同 シーボルトの案内で各地で先 任者)の慧眼にも注目すべきである。 は宮様であり、 訪ねた児玉陸軍参謀次長 と言える。 なった。 ら短期 ところで、渋沢栄一は 日本が勝つだろう」との評価か 、間での戦費の調達が可能と 日露戦争勝利の陰の功労者 また開戦を目前に渋沢を 参謀本部の実質的責 (参謀総長 「人間は夢 ある。 現在の我々が読んでも通じるものが き訓者 福果行画念な ななななななし

である。

滓をできるだけ多く貯えよ

うとするものはいたずらに現世に糞

られている。

金銭資産は、

仕事

の滓

(かす)

学び、

栄一の経営哲学のエッセンスが込め

る。

また、

同書の次の言葉には、

真の商才ではないと断言して

Ž, を持たなければならない」として、 ている。 夢七訓」の名言を提唱しており、 かもこれが余程気に入ったと見 自ら色紙に揮毫して署名し残し 内容は次のとおりであり、 夢故成実計信理夢夢 なに果行画念想な七 本なななななな 福さえる

(1904年)の 陸軍参謀 建基 • 首都圏墓石施工トップクラスの実績

開戦止む無しとの考えに至り協力す 政策の意図を素早く的確に理解し、 影響から当初は難色を示していた 本部次長の経歴を有するメッケルの ることを決意した。直ちに欧米を回 国家予算が7億円)という莫大な戦 次長の児玉源太郎から財界としての 日露戦争開戦に際しては、 の調達に関しては、 日英同盟の影響とドイツで参謀 日本国債の発行と募集を図った 児玉の話からロシア帝国の極 20 億円 国民経済への (当時 公営霊園のご案内 駅に近い公園墓地のご案内 いちかわ大町霊園

掛けて可愛がっていた)の随員とし

継者として期待しており、

特に目を

異母弟・徳川昭武

(慶喜は自分の後

に将軍の名代として出席した慶喜の

てフランスへと渡航したことであ

パリ万博を視察したほか、

日

児玉大将が満洲総軍の参謀総長な

7 年)

パリで開催された万国博覧会

特筆すべきは、慶応3年

1 8 6

己を捨てて、

道理のあるところに従

う積りである

益するということなら、

余は断然自

支援を依頼された。

道理にも叶い、

国家社会をも利

もしそれが自己のためにはならぬ かと考える。そう考えてみたとき、 更にかくすれば自己のためにもなる てその道理にかなったやり方をすれ

変えた。その結果、

前述した明治維

新の日本の殖産興業に寄与すること

道理にかなうかをまず考え、

しかし

験が、その後の渋沢の人生を大きく

のたとえ)「事柄に対し如何にせば

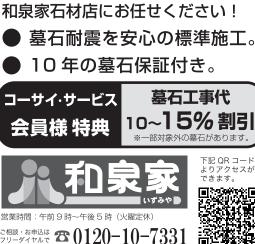
〈注:糞土の 牆 =役に立たないこと

の牆を築いているだけである」。

ば国家社会の利益となるかを考え、

となったのである。

更に、明治37年



ホームページ http://www.izumiya-sekizai.co.jp/